HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モスコーヴィヤの日本人
Author(s)	中村, 喜和; NAKAMURA, Yoshikazu
Citation	スラヴ研究, 26, 1-30
Issue Date	1980-08-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5102
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00002052864.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

モスコーヴィヤの日本人

中　村　喜　和

〔目　　次〕

1. 殉教の記録から
2. シャーリイ兄弟冒険譚から
3. モスクワでの受難
4. 「マリーナの日記」から
5. 二つの殉教
6. 後 日 譚

1. 殉教の記録から

17世紀のはじめ，動乱時代のさなかのロシアで殉教した日本人イルマンがいた。この人物についての記録は，はやくも1623年ミュンヘンで刊行されたN. トリゴー神父の『日本殉教録』の第3巻第8章に「モスコーヴィヤで名誉ある殉教を遂げた日本人ニコラスについて」という題名のもとに収められている。著者はまず記述の内容がアウグスティノ会の神父たちとカルメル会士ヨハンネス・タデウスの証言にもとづくものであり，かつてゴア大司教をつとめたのちポルトガルのブラガの大司教となるアレイショ・デ・メネーセスによって確認され報告されたものであると断わっている。ラテン語で書かれた本文の主要部分を以下に訳出しておこう[1]。

アウグスティノ会に所属するポルトガル人ニコラス・デ・メロ神父はフィリピンに渡って16年を過ごしたのち，その地の代表者に選ばれ，助修道士ニコラスなる者を随行者としてともない，ふたたびヨーロッパに向かった。後者は幼少のころ両親とともに日本からマニラに渡航してニコラス神父から洗礼を受け，ニコラスという名前を与えられた者である。彼は修道院で育てられ，僧衣をさずけられて信仰告白をした。この日本人をしたがえたニコラス神父は，その目的を達するために上述のゴア大司教の口添えを得べく，インド経由の航路をとることに決めたが，ゴアに着いてみると，その年のうちにインドからポルトガルへ向かう船はないことがわかった。しかし年を越せば，ヨーロッパに帰る目的が達せられなくなることを恐れて，急遽ホルムズまで船で行き，そこからはペルシャを横切る陸路をとることにした。折しもペルシャ王がローマ教皇とキリスト教国の諸君主への使節をヨーロッパに派遣することにしていたので，神父はその一行に加わった。使節団はモスクワまわりの道をとり，手はじめにポーランドをおとずれる予定になっていた。モスクワに到着した二人は，ミラノ出身のパウロという医者のもとに客として迎えられた。どのような事情でこの医者がモスクワにいたかは不明である。彼は

1) Trigault, N. *De Christianis apud Iaponios Triumphis*, München, 1623, p. 288-292.

カトリック教徒であったので，ミサやもろもろの秘蹟を自分の家でカトリックの典礼にしたがってとり行なうことを許し，そのときちょうど生まれたばかりの娘にローマ風の洗礼を受けさせた。ところがモスクワでは国禁となっているその行為がカルヴァン派の英国人たちの密告によって大公の知るところとなり，大公の命令で二人は捕縛されてソロフキ島に流され，そこにあるロシア正教のバジリオ会の修道士たちにあずけられた。そこで監禁されること六年に及んだが，二人はきびしい仕置きを立派に耐えた。彼らの食事は修道院の下僕のものと同じであった。その他のことはモスコーヴィヤにおけるローマの信仰への憎悪から推し測ることができる。二人はしばしば改宗を迫られたが，その要求を断乎かつ適切に否みとおした。

そうこうするうちに，モスクワ大公が世継ぎをのこさずになくなって，ヨーロッパ中に名前を知られたドミートリイ某なる者がポーランド王の援助のもとに多くの戦闘を行なったのちに，大公の位についた。彼はカトリック教徒であったので，もし二人の監禁のことを耳にしていたならば，早速彼らを釈放するように命じていたにちがいない。実際にはクレメンス八世が跣足派のカルメル会士をモスクワ経由でペルシャに派遣したとき，教皇の権威によってこのことがなされたのである。こうして二人はソロフキ島の獄舎から釈放されたが，それも束の間で，まもなくずっときびしい牢獄に押しこめられることになった。というのは，二人がモスクワに帰り着いたとき思いがけなくモスクワは内乱のさなかにあって，ドミートリイに代わってワシーリイがモスクワを支配しており，ロシア正教徒のワシーリイは彼らを他の容疑者たちといっしょに即座に拘禁してしまったからである。ただし二人がローマ教皇の権威を否定しロシア正教の典礼にしたがって洗礼を受けなおすならば，自由の身にされた上に大公の恩顧をうけるであろうという条件がつけられていた。その条件を拒否したので，二人は苛酷な鞭打ちを蒙ったのち，獄舎の中でも一番暗い部屋にとじこめられた。彼らはそこに四年間監禁され，何度も鞭打たれたり，裸で村々を引きまわされたり，広場に燃えさかる巨大な薪の山の前に引き出されたりした。しかし二人ともカトリックの教えを相変らず固く守っていた。その態度をいつまでも変えないので，彼らは一再ならず報復を受け，さまざまな罵詈雑言や鞭打ちや殴打にさいなまれてから獄舎に連れもどされるのであった。

やがて二人は枷をはめられたままモスクワからヴォルガ河畔のニージニイという町に連れていかれたが，そこでも彼らは志を曲げなかったので，最後にはワシーリイ大公の命令で燃えさかる火あぶり台の前に連れ出されて，大公の言葉として，もし改宗しなければ火刑に処すると言い渡された。二人が刑場にひき出されたのは聖使徒アンデレの祝日であった。この光景を見ていた群衆は，両者の態度とりわけ日本人の態度に驚嘆した。ロシア人は，この日本人もその伴侶からひきはなしさえすれば屈服するだろうと考え，彼の心をひるがえさせるべく別の場所に連れていって，彼をおどすためにいろいろな拷問の道具を見せながら，ローマの教えを捨てるようきびしく迫った。しかしこの日本人は平然として，自分は真理より誤謬を選ぶことはできない，すなわち幼少のころ今の伴侶からさずかった信仰を捨てるようなことは夢にも思わないと答えた。相手はおどしが何の効果もあらわさなかったので詭計を用いることにし，あらかじめしめし合わせ

ておいたとおり一人の役人が駆けつけて，ニコラス神父が自分から棄教したと虚偽を告げた。しかし日本人は毅然として，それは全くの嘘だ，自分の伴侶はいかなる拷問を受けてもふるえ上がるような人ではないし，もしかりにそのようなことがあったとしても，自らの魂の救済を心にかけることは各人の義務であるから，自分としてはローマの信仰のためなら何度死んでもかまわない，といとも大胆に答えた。そこで役人がそのことを大公に復命すると，大公はその不屈の心に驚き，柔和な気持になって刑罰を軽減させ，次のように命じた。すなわちこの日本人をその仲間のところに連れもどし，火あぶりの用意をしておどして，それでも拒んだら首をはねて自分のもとに送って見せるように，と。

ニコラス神父もまた裸で火あぶりの薪のそばに立たされ，きびしい寒さに身をさらしながらふるえていた。こんな状態でも互に見つめ合っていることは二人にとって大いなる慰めであった。こうして日本人を火あぶりにするとおどしても無駄だったので，命じられたとおり，刑吏が伴侶の目の前で彼の首をはねた。そして1611年のその日のうちに，はねた首を大公のもとへ慰みものとして献上した。そのあとで聖なる死骸はこの民族の習慣にしたがって犬の餌に投げ与えられたが，犬たちは正教徒ほど兇悪ではなかったので，その死骸にどうしても近ずこうとしなかった。そこでカトリック教徒たるポーランドの商人たちはそのことを奇蹟とみなし，法に反することではあったが，日本人の死骸を引き取った。ところがロシアの正教徒のなかにはこの驚くべきことを悪意に解釈して，ローマの異端者どもの体はペストのばい菌にみちみちているので犬も食わないのだ，と言いふらす者がいた。ロシア正教の徒輩や異端者どもの誤りはどんな奇しき徴候や奇蹟によっても正すことができないのである。

かくてニコラス神父は聖なる望みの涙にぬれながら自分の受難を待った。そのうち上述のポーランド人たちの取りなしで運命が変えられ，監視づきの境遇にもどされた。つづく一年間は虐待の中で幾度も殉教を遂げそうになったが，そのたびにあやうくまぬがれた。折しもここにかつてドミートリイ大公の后であったマリーナという者があらわれた。彼女はカトリック教徒であり，自分のもとにいるカトリックの神父のとりなしもあって，ニコラス神父の釈放をしきりに望んだ。彼女の望みはなかなか実現しなかったが，やがてワシーリイ大公が第二のドミートリイによって殺され，後者が後継者の座につくと，マリーナは自分の願いが成就することを待ち望んだ。その期待は実現した。すなわち夫が大公になったおかげで，マリーナの願いがかなったのである。かくて長年にわたる監禁生活を過ごしたのちニコラスは獄舎から出されて，自分を自由の身にしてくれたマリーナのもとに迎えられ，そこで家族全体の師父とみとめられてカトリック式の礼拝を司った。この邸にバルバラという貴族の婦人がいた。それはドミートリイ大公のもとにマリーナを送り届けるべくポーランドからやって来て，その後マリーナに女官として仕えてきた女性であった。彼女ははからずも非常に敬虔なカトリックの司祭をもつことができたので，その喜びは大きかった。とはいえ内乱はますます深刻となり，マリーナは夫の敵から追及を受けたので，ペルシャと境を接する辺境のアストラハンまで退き，便宜があればペルシャにおもむこうとした。そのうち，マリーナを守ってきた家来

たちが敵から圧迫され，この町で殺された。一方バルバラはニコラス神父ともども枷をはめられ，ローマの信仰ゆえに，また国禁を犯してラテン風の典礼を行なったかどで告訴された。そして，もしロシア正教の典礼を受け入れ，洗礼を受けなおさなければ火あぶりにすると言い渡された。それから二人は処刑の場所に引き立てられ，それぞれ用意された火あぶりの薪の前に立たされて，改宗を迫られた。しかし二人はこれを拒否したので，彼らはともに火の中に投ぜられた。そして火がまわるにつれて着衣が燃え，皮膚があらわとなる中で，最後の息を引き取った。

日本人ニコラスに関する記録は，このほかにもカトリック教会関係の何種類かの著作に含まれている。筆者はまだそのすべてにわたって目を通したわけではないが，書かれている内容はいずれも大同小異といったものであるらしい。たとえば1780年にアウグスティン・マリア・デ・カストロによって執筆され，1954年にマドリッドで刊行されたスペイン語の『極東におけるアウグスティノ会宣教師』[2]もニコラスの殉教に1ページあまりをさいているが，内容的には上に引用したトリゴー神父の『殉教録』の要約といった観がある。もっともカストロ神父の依拠したのはトリゴーの著述そのものではないらしく，われわれは『極東におけるアウグスティノ会宣教師』から，くだんの日本人が1594年に修道士となる誓いをたてたこと，またそのとき彼がニコラス・デ・サン・アウグスティノなる修道名を与えられたことなどの新しい事実を知ることができる。ニコラスの殉教の日付も『殉教録』では単に聖アンデレの祭日とあるだけなのに，後者では1611年11月30日と月日で示している。なおカストロ神父は日本人ニコラスにつづいてメロ神父の生涯についても言及しているので，他の資料をも参照しながら紹介してみよう。

ニコラス・メロ・イ・モランは1550年にポルトガルで生まれた。カストロはコリンチアンの出身とするが，カヴィルハオの名門の出とする説もある[3]。もっとも，16世紀末にはポルトガルはスペインのフェリペ二世の支配下にあったので，メロもスペイン人と呼ばれることがあった。子供のころ新大陸にわたり，1580年30歳のときにメキシコのプエブラにある修道院でアントニオ・デ・メンドーサ神父の導きをうけてアウグスティノ会の修道士となった。そこで教養諸学と神学を学んだというから，かなりの晩学といえよう。2年後の1582年にフィリピンに派遣された。ここではまず群島南部のビサヤ諸島で布教に従事し，やがてマニラに近いタガロ地区に移された。その後メロはアウグスティノ会フィリピン管区長によってマニラの同会修道院の修練長に任命される。その理由は彼がどの任地でもその土地の言葉をすぐに習得してめざましい伝道の成果をあげたことと，生来善良で敬虔な性格の持主だったためであるという。

1596年マニラでアウグスティノ会の会議が開かれた。この会議はローマの総会に派遣する管区の代表としてフワン・タマヨとディエゴ・デ・ゲバラの二人の神父を選んだ。彼らはこの年の夏にスペイン船でマニラを出航し，メキシコと大西洋経由でローマに向かった。ところがこの船は嵐におそわれて土佐に漂着した。そのさい船長らの不穏な言辞がも

2) Castro, A. *Misioneros Augustinos en el Extremo Oriente 1565-1780* (*Osario venerable*), Madrid, 1954, p. 245-246.
3) Пирлинг, П. *Исторические статьи и заметки*, СПб., 1913, стр. 70.

とで積荷の没収や，ひいては秀吉による禁教令再発布と長崎での26人のキリシタンの殉教がひきおこされたことは，サン・フェリペ号事件としてよく知られている。アウグスティノ会の神父たちはフィリピンに戻されたが，同会ではただちに臨時会議を開催して，今度はニコラス・メロ神父に日本人助修道士ニコラスを付きそわせてローマへ派遣することを決定した。両ニコラスは1597年にマニラを出発し，前回とは逆に西まわりの航路をとった。彼らの事蹟と殉教をはじめて日本に紹介したH. チースリク師によれば，二人がマカオ，マラッカ，ゴアとポルトガル領植民地を経由するコースを選んだのは，メロがポルトガル人だったためであるという[4]。ゴアでは『殉教録』に名をあげられている大司教のアレイショ・デ・メネーセスに会った。メネーセスもアウグスティノ会の出身者だったので，ローマ総会のための打合せが行なわれたらしい。折あしく，ゴアから先はその年のうちにヨーロッパへ向かう船の便がなかった。そこでメロとその日本人随行者がホルムズまで航行し，そこから先は当時のペルシャの首都イスファハンを経てロシアにはいる陸路を取ったことは『殉教録』にも述べられているとおりである。このころアウグスティノ会はペルシャでも布教活動を行なっていた。イエズス会士で教会史家のP. ピルリング（Pierling とつづる。読み方がよくわからぬので本稿ではロシア風にピルリングと表記しておく）によると，ペルシャ王アッバースは二人を厚遇したので，1599年5月24日付けでメロから僧団長あての希望にみちた手紙がのこっているという[5]。カストロ神父の記述は日本人ニコラスの場合と同様，メロのロシアにおける受難についてもほんの数行を費しているにすぎないが，例のマリーナの女官のバルバラがメロによってアウグスティノ会の第三級修道女の位をさずけられたことと，この二人の「有名な」殉教が1616年11月1日の出来事であったことを伝えている。トリゴー神父の『殉教録』ではメロとバルバラの最期は1614年とされていて，2年の開きがある。

ところで，日本人ニコラスとは一体いかなる人物であったか。『殉教録』にも『極東におけるアウグスティノ会宣教師』にも彼の生年や俗名は記録されていない。わかっているのは，彼が幼いとき両親といっしょに日本からマニラに渡航したこと，マニラで洗礼を受けたこと，1594年にアウグスティノ会にはいって修道誓願をたてたこと，くらいなものである。ニコラスの名はメロから与えられたことになっている。修道院にはいった年から逆算して彼の誕生を1570–80年代，つまり元亀か天正年間とするチースリク師の推定[6]はおそらくあたっていよう。

岩生成一氏の『南方日本町の研究』によれば，近世初期つまり鎖国以前の日本人の南洋進出時代に，日本人が最も多く居住し活動していた場所はフィリピン群島であった[7]。1570年にスペイン人がマニラを占拠したとき，そこには20名の日本人が住んでおり，その日本人の中にはパウロと名のるキリスト教徒もいたという。その後，安価な鹿皮や金を求めてルソンへ来航する日本船の数は次第にふえ，移住する日本人も多くなった。とくに1584年平戸の領主松浦隆信がマニラに使いを送って通商を求め，さらに翌年には肥前の大村純

4) H. チースリク，『世界を歩いた切支丹』，東京；1971，167ページ。
5) Пирлинг, П. *Указ. соч.*, стр. 72.
6) H. チースリク，前掲書，167ページ。
7) 岩生成一，『南洋日本町の研究』，東京，1940，215ページ。

忠が商船を派遣して以来，日本の船は毎年マニラとの間を往復するようになった。1593年のころにはマニラ在住の邦人は300人にのぼり，彼らは郊外のディラオ（現在は市内に含まれている）に日本町をつくっていた。2年後にその数は1000人に達したというから，かなり急速な増加ぶりである。しかし翌1596年のサン・フェリペ号事件のあおりで日本人の大部分が追放され，ディラオの町も一時的に衰微した。その動揺のさなかメロ神父の随行者に日本人イルマンが選ばれたことはどのような意味をもったのであろうか。

殉教者ニコラスがマニラでキリスト教に入信しているところをみると，彼の両親は少なくともルソンへ移住した当時キリシタンではなかったことがわかる。ロシア側の二，三の史料でニコラスが「貴族の子」とあることから察すると，父は武士であったかもしれない。この時期に南洋へわたった日本人の出身地に関する統計の類はむろんないが，大体の傾向として九州と近畿の出身の者が多かった。岩生氏のあげている具体的な例によれば，17世紀初期マニラに住む日本人キリスト教徒の中で身もとのわかる25名の出身地は次のとおりであった。長崎　4人，豊後　2人，肥後　1人，丹波　1人，河内　1人，摂津12人，京都　2人，伊賀　1人，朝鮮　1人[8]。

いずれにせよ，ロシアの土と化した日本人ニコラスの母国とのつながりは，今のところ確かめるすべがないようである。

1617年にフィリピン総督フワン・デ・シルバと貿易取引をした日本人にカピタン・ルイス・メロと称する者のいたことが岩生氏の著書でしばしば言及されているが[9]，この人物がニコラス・メロあるいは日本人ニコラスとどのような関係にあったかはわからない。

2. シャーリイ兄弟冒険譚から

メロと日本人ニコラスがペルシャからロシア経由でヨーロッパに向かったのは1600年の春から夏にかけてのことであったらしい。

1597年にマニラを出帆し，したがっておそらくその年のうちにゴアに到着し，そこからペルシャ湾口のホルムズ（ここも当時ポルトガル領だった）を経てペルシャにはいったはずの二人のニコラスが，2年から3年にちかい歳月をどのように過ごしていたかは謎である。ゴアでヨーロッパ行きの船を待たなかったのは年内に便船がなかったからであり，翌年まで待機していてはヨーロッパでの使命が果たせなくなってしまうことをメロが恐れた，と『殉教録』はいう。おそらくペルシャで不測の事態が生じたにちがいない。ペルシャから先の旅程にしても，ヴォルガをさかのぼるロシア経由のほかに，メソポタミアに出てユーフラテスを遡行しアレッポを通って地中海に抜ける道もあった。道中はかならずしも安全ではなかったらしいが，ローマへはそのほうがずっと近道であることは明らかである。現に1599年にこの道を逆にたどってイタリアからイスファハンに到着したイギリス人の一団がいた。アンソニーとロバートのシャーリイ卿兄弟と彼らの部下たちがそうである。このイギリス人たちはのちにモスクワまでメロ主従の旅仲間となり，二人のニコラスの運命に重大な影響をもつことになるので，それまでの彼らの冒険にみちた遍歴をたどっ

8）岩生成一，『朱印船と日本町』，東京，1978，188ページ。
9）岩生成一，『南洋日本町の研究』，282，301-304ページ。

ておくのもあながち無駄なまわり道ということにはならないであろう。

アンソニー・シャーリイはトマス卿の次男として1565年に生まれた。伝記作家によると，シャーリイ家はサクソン王エドワード以来の家柄を誇る名門貴族で，ヨーロッパ中の王家と何らかの血のつながりをもっていたという。つづいて以下の記述は主として，1825年にロンドンで出た『シャーリイ三兄弟の冒険旅行記』[10]にもとづくものである。

アンソニーはオクスフォードのハート・ホールで学び，1581年に Bachelor of Arts となった。ついでオール・ソールズ・カレッジに入学したが，Master of Arts の資格はとらずに退学した。エリザベス処女王の治下，merchant adventurers の活躍する時代の息吹きが若い貴族を学窓にとじこめておかなかったようである。1586年大陸にわたった21歳のアンソニーはフランス王のために戦い，アンリ四世から聖ミシェル勲章をさずけられた。このためエリザベス女王の逆鱗にふれ，二度も査問をうけた末，しばらくは監禁されていたらしい。1596年から97年にかけては数隻の英国船を指揮してまずアフリカ西海岸を南下し，南大西洋を横切って南米大陸先端のフエゴに達し，そこから今度はカリブ海まで北上してドミニコ，ジャマイカに寄港して帰国するという大西洋一周航海をした。いたるところで小島を発見してはイギリス国旗を立てたというから，まぎれもなく植民地獲得を目的とする征服航海である。その翌年の1598年には女王の寵臣エセックス伯の勧めで，20人あまりの百戦錬磨の男たちをひきつれ，当時ローマ教皇と争っていたフェラーラのチェーザレ・デステの救援におもむいた。国際的な傭兵隊長（コンドッティエーレ）という格である。アンソニーの一行はオランダに上陸し，南ドイツのニュールンベルクを経てアルプスを越え，目的地に達する予定であった。ところがアウクスブルグまで来たとき，フェラーラがすでに教皇に屈してしまったという知らせを受け，にわかに行先きを変更してヴェネツィアに出た。ここで数カ月無為の日を送っているあいだに，アンソニーはペルシャの商人と知合いになった。この商人がどのようにさそったものか，アンソニーと弟のロバート，それに部下を合わせて26人がヴェネツィアの船に乗りこんでペルシャに向かった。それが1599年のことである。彼らはヴェネツィアを出帆してから，ギリシャのザキントス，クレタ，キプロスと船を乗りついで，トリポリに上陸した。それからは陸路でアレッポを通り，砂漠を横断してメソポタミアにはいった。船の中でも陸の上でも血気さかんな冒険者たちは何回か危険にも出会い，武勇を発揮する機会にもめぐまれたが，くわしいことは省略する。ザキントスからメソポタミア一帯にかけてはすべてオスマン・トルコの支配に服していたが，チグリスの流域の東，ザグロス山脈を越すとそこはペルシャ王の勢力下で，アンソニー一行は期待どおりアッバース一世に歓迎されて，彼の宮廷で仕えることになった。ヴェネツィア以後の行動はアンソニーの配下で秘書役をつとめたらしいジョージ・マンウェアリングの記録があって，比較的詳細に知ることができるのである。

ペルシャ王（シャー）アッバース（1571–1629）はサファヴィー朝きっての名君と称され，大王とも呼ばれている。シャーリイ兄弟が入国した1599年は即位13年目にあたり，都はカズビーンからイスファハンに移っていた。内政面では貴族の力を弱めつつ中央集権化をおしすすめて都市，道路，橋梁の整備に力を入れる一方，対外的には西のトルコ，北東のウズベ

10) *The Three Brothers, or the Travels and Adventures of Sir Anthony, Sir Robert and Sir Thomas Sherley in Persia, Russia, Turkey etc.*, London, 1825.

ク族と戦争を行なって領土を拡張していた。アンソニーらを招いたのは，ヨーロッパの進んだ戦闘技術とくに砲術を学ぶためで，イギリス人たちは軍事顧問という扱いをうけたらしい。それにはアンソニー・シャーリイはうってつけの人物といえた。1629年まで42年間におよぶ長い治世のあいだに，アッバース一世はトルコ軍をやぶってアゼルバイジャン地方の失地を回復し，奥カフカースまで版図を拡げたばかりでなく，東インド会社の英国艦隊の助けを得てホルムズからポルトガル人を駆逐したりした。王自身はむろんキリスト教徒ではなかったが，国内でカトリックの布教を許した。宿敵トルコに対抗するため，ヨーロッパと手を結ぶ政策をとったのである。

マンウェアリングの言葉を信じるならば，アッバース王ははじめロバート・シャーリイを儀礼的な目的でエリザベス女王のもとへ派遣する計画をたてた。それに対して兄のアンソニーがヨーロッパのすべての君主に呼びかけて，対トルコ大同盟を結ぶよう王に説いた。ペルシャ人のあいだには，いつかキリスト教徒が遠くからやってきてトルコを討つ秘策をさずけてくれるという言い伝えがあったので，王は喜んでこの提案を受け入れたという。結局ペルシャ人高官の某とアンソニーを使節に任命し，それに16人の随員をつけ，かずかずの高価な贈物をもたせて，ロシア経由で出発させることになった。目的が目的なので，トルコ領を通る南まわりのコースをとるわけにはいかなかった。あらためて断わるまでもないことであるが，ロシアは単なる通過地であって，アンソニー・シャーリイの「ヨーロッパ」には含まれていなかった。

マンウェアリングの手記にカトリックの修道士が登場するのは，ヨーロッパへの使節団の編成がおわって，あとは出発を待つばかりのときだった。フランチェスコ会の修道士がイスファハンにあらわれ，ドミニコ会出身のホルムズ司教が重要な使命を帯びてスペイン王のもとにおもむくためペルシャの首都を通過するので，アッバース王に謁見をたまわりたいとアンソニーに申し入れた。請われるままに，アンソニーは紹介の労をとった。マンウェアリングはこの「司教」の名を示さず（あとの文章で一度だけニコラスと呼んでいる），アウグスティノ会ではなくドミニコ会の修道士と述べているが，前後の事情を考えれば，どうしてもこの人物がニコラス・メロでなければならない。彼は空白の2年間，何かいきさつがあってホルムズの司教職についていたのかもしれない。

マンウェアリングによると，王と修道士のあいだに次のような問答が交された。

「今までどこを旅してきたか」

——教皇の使いとして，これこれの地方のキリスト教徒のもとに派遣されていました。

「教皇とは何者か」（王はわざと知らぬふりをしたのである，とイギリス人の注）

——地上におけるキリストの代理人で，罪を許す力をもつ者です。

「ならば彼は非常な老人にちがいない。ユダヤ人がキリストをはりつけにしたとき以来この世に生きているのだから」

——そのときから多くの教皇が立ちました。亡くなるとつぎつぎに代わるのです。

「何と！　教皇はイタリアかローマ生まれの人間なのか」

——仰せのとおりです。

「教皇はキリストかあるいは父なる神と話をしたことがあるか」

——いいえ，ございません。

「わしは父なる神かキリスト以外に，われわれの罪を許せる者がこの世にいようとは思わぬぞ」

異教徒のシャーに言いこめられて修道士は答えることができなかった，とマンウェアリングは書いている。16世紀のはじめに独立の英国国教会をおこして以来，イギリスはローマ教皇と対立的な関係にあった。その上アンソニーらはフェラーラを助けてローマ教皇軍と戦を交えようとした前歴をもっていた。はじめから彼らがカトリックの修道士に対して好意をいだいていなかったことは明らかである。一方，前述のようにメロはメロで，アッバース王と会った結果その後のペルシャ布教に明るい期待をもったという手紙を書いているのであるから，マンウェアリングの記事は割引きして受けとる必要があるかもしれない。

『殉教録』によれば，アッバース王の手紙のなかにはローマ教皇に宛てたものもあった。対トルコ同盟の呼びかけであれば，教皇やスペイン王への手紙も書かれたとみるのが自然である。そしてそれらの手紙はメロ神父に託されたと想像される。実はこの手紙がなかったとすれば，メロと彼に同行したわがニコラスの運命は別のものになっていたかもしれないのである。

ヨーロッパへの使節団に「偽修道士」も同行することになった，そしてこの男はその奸悪さをもってわれわれを裏切ることになった，とマンウェアリングの手記は憎しみをあらわにしている。アルフォンソという名前の上記のフランチェスコ会士もこの使節団に同行した。どういうわけか，イギリス人の記録には日本人ニコラスへの言及は一回もみられない。またマンウェアリングの手記にも，カスピ海以後の書記役をつとめたパリーの手記にも，旅の所要時間や都市での滞在期間が示されているだけで，概して日付を知ることができないのが残念であるが，モスクワ出発の日付（1601年5月半ば）から逆にたどって，使節団がイスファハンを出たのは1600年の初夏の候であったと推定される。

一行はカスピ海を北上してヴォルガ河口に向かったが，悪天候のために1000キロあまりの航海に2カ月を要した。しかも二度にわたって乗船が坐礁するという不運に見舞われ，携行した荷物の多くを水中に投ずることを余儀なくされた。アストラハンに着くと，ロシアの士官が出迎えにあらわれた。ペルシャ王があらかじめロシア領内通過の許可を得るために使者を送っていたからである。アストラハンからモスクワまでは水路と陸路を合わせて10週間の道のりであった。当時ロシア領内を通る外国人使節はロシア皇帝から食料を無料で下賜されると同時に，軍隊の護衛を受けることになっていた。これでは囚人とあまり変わりがない，とパリーは不満をもらしている。ヴォルガをさかのぼること7週間でニージニイに着いた。この間，3，4個所で木造の砦を見たほか，注目に値するものは何もなかった。例外はカザンだけで，使節団はこの町に立ち寄っている。ヴォルガはヨーロッパ第一の大河ではあるが，夏の渇水期には随所に浅瀬ができて，航行には困難がともなう，とこの時代の旅行者たちは記録している[11]。ニージニイは正式にはニージニイ・ノヴゴロド（現ゴーリキイ市），オカ川がヴォルガに合流する交通の要衝にあって，13世紀以来栄えた町である。

11）たとえばオレアリウスの旅行記など。A. Olearius, A. *Vermehrte Newe Beschreibung der Muscowitischen vnd Persischen Reyse*, Schleswig, 1656, S. 333-377.

ニージニイに着いてひと月目，やっとモスクワから身分の高い官吏が派遣されてきて，そこからは陸路で首都まで案内してくれた。先ばしりして言ってしまえば，アンソニーの一行はモスクワに6カ月とめおかれた末，1601年の5月半ばに出発を許されることになる。モスクワからは「森と川のほか何も見えない場所」を6週間旅をして，聖ニコライという海岸の港に到着した。

パリーの率直な記述が示すところによれば，ペリシャ使節団のロシア横断（むしろ縦断にちかい）旅行は護衛のうるさい監視を別にしても，快適とはほど遠いものだった。まずアンソニー・シャーリイとペルシャ人使節のあいだに不和があった。もし中立的なロシア人の護衛がいなかったならば，ヴォルガの川の上でたがいに殺し合いもしかねまじい勢いだった。カトリックの二人の神父たちもいがみ合っていた。ペルシャ人使節はニコライ・メロと組み，アンソニーはアルフォンソと仲間になった。アルフォンソはアンソニーにこんなことを言ってメロを中傷した。この男はインドでさんざん放埒な生活を送ってきた。スペイン王に呼び戻されるのもそのせいである。メロがペルシャ王に献上した贈物も，実は他人からあずかった品物である，云々。讒言を真に受けたか，それとも口実に使ったのかわからぬが，アンソニーはニージニイに着く前にメロの身柄を拘束してしまった。旅行中でもアンソニーは屈強な配下にこと欠かなかった。

ロシア側の扱いもアンソニーには不服だった。モスクワの政府はイギリス人がペルシャ人使節と同格であることを理解しなかったようである。ことごとにペルシャ人使節を立て，アンソニーをただの旅行者のように待遇した。時のツァーリであるボリス・ゴドゥノフに謁見するための行列の順序も，アンソニーは使節のみならずすべてのペルシャ人の後塵を拝するように決められた。アンソニーは承服しがたいとしてクレムリンにおもむくことを拒否した。ボリスはアンソニーの態度をとがめて，このイギリス人貴族を10日間牢にとじこめてしまった。おかげでメロのほうは自由の身になることができた。ペルシャ人使節はこの機会をとらえてメロをけしかけ，アンソニーが身分のいやしいイギリス人であり，世界中をまたにかけているスパイだなどと言いふらさせた（こういうことがすべてイギリス人パリーの記録であることを忘れてはならない）。アンソニーが所持していたアッバース王の手紙も取り上げられ，開封された。結局，ツァーリの役人の前で，アンソニーとメロが対決することになった。その席上でも，アンソニーは自分に対するツァーリの仕打ちに公然と非を鳴らした。パリーの手記によれば，それは暴言に近いものだった。メロがその言葉尻をとらえると，激怒したアンソニーはやにわに「でっぷり肥った修道士」の顔面めがけて拳骨を見舞った。メロは雷にうたれたように，その場にくずおれてしまった。35歳の軍人が50歳の神父をなぐり倒したのである。

対決の意外な結末をロシアの役人がどう判断したかわからないが，アンソニーに対する扱いはその後改善され，彼はそのころモスクワに居住していたイギリスの商人たちとも自由に交際することができるようになった。16世紀の50年代にイワン雷帝がたまたま白海に迷いこんだイギリスの merchant adventurers に交易上の特権を与えて以来，英国モスコーヴィヤ商会が首都の商工業区であるキタイ・ゴロドに本拠をかまえて活発な貿易活動を行なっていたのである。

殴打事件以後メロの名前が一回だけパリーの手記に登場する。半年ばかりのちペルシャ使節団が聖ニコライの港で船を待っていたとき，メグリッチというモスコーヴィヤ商会の社員がモスクワからやってきて，メロがどこか辺鄙なところへ流されたという知らせをもたらしたのである。聖ニコライは白海にそそぐドヴィナ川の河口にある集落で，おそらく同名の教会からこう呼ばれたのであろう。今ではよほど大きな地図でも記載されていないが，1562年にロンドンで出版されたジェンキンソンの地図に見える。のちにアルハンゲリスクの名前で知られるノヴォ・ホールモゴルィの建設がイワン雷帝の命令ではじまるのは1584年であるが，1601年にはまだ聖ニコライがヨーロッパに開かれたロシアの唯一の窓であったことがわかる。ロシアの版図はまだバルト海には届いていなかった。皮肉なことにメロが流された「辺鄙なところ」というのは，実は聖ニコライとはつい目と鼻の先といってもいいソロフキ島であった。

アンソニーが露骨に不作法な態度を示し，シャーの手紙の件でかなり深刻な嫌疑をかけられたにもかかわらず無事にロシアを出ることができたのは，母国イギリスが新教国であったことと，ロシアと良好な外交関係を保っていたことが大きな原因であったと考えられる。それに対して，メロ神父はほとんど孤立無援だった。しかもカトリックの信仰はいかなる異教にもましてロシアでは忌み嫌われていた。アンソニー・シャーリイとは反対に，二人のニコラスはどのような些細な油断も命とりとなりかねない危険の中にいたのだった。

3. モスクワでの受難

よく知られていることであるが，1430年代の末イタリアのフェラーラとフィレンツェで開かれた宗教会議で東西両教会の合同に尽力したモスクワ府主教イシドーロスは，帰国したとたんに大公のワシーリイ二世によって逮捕されてしまった。この出来事はロシア人のあいだの反カトリック的感情のつよさを端的にあらわしていた。

15世紀の後半以後多くのイタリア人技術者がモスクワに招かれた。クレムリンの城壁の改築，クレムリン内の宮殿や寺院の建築，大砲や貨幣の鋳造が彼らの手で行なわれたほか，天文学や医学などイタリア人の活動は多方面にわたったが[12]，カトリックの教会が彼らのためにつくられたことはないようである。中世史家のチホミーロフによれば，1492年にアウグスティノ会修道士のジョバンニなる人物がモスクワに住んでいて，あるロシア人寡婦と結婚するためにロシア正教に改宗して，大公の恩賞を受けたという記事がこの時代の年代記に見えるというが[13]，ジョバンニがロシアへやってきた経緯は全く不明とされている。イタリア人技術者は大部分がカトリック教会から東方正教会に改宗したという[14]。

モスクワ政府はプロテスタント諸派には比較的寛大な態度でのぞんだ。リヴォニア戦争(1558-83)の最中に3000人あまりの捕虜がモスクワへ連行されてきたとき，イワン雷帝

12) この点については次の論文がくわしい。松木栄三，「ロシア＝地中海関係の一断面」，『地中海地域における集落形成の諸問題』，東京，1980年。
13) Тихомиров, М. Н. *Средневековая Москва в XIV-XV вв.* М., 1957, стр. 212.
14) Nolte, H. -H. *Religiöse Toleranz in Rußland 1600-1725*, Göttingen, 1969, S. 110.

は彼らのためにルター派教会をたてる許可を与えた。1575年あるいは76年のことである。この教会はまもなく雷帝の悪名高い親衛隊オプリーチニナによって破壊されるが，雷帝の死後まもなく再建され，80年代の末からはこの教会づきの牧師が派遣されていた。この教会はのちに移転して，オレアリウスのつくったモスクワ都市図には「ドイツ教会」としてヤウザ川の北に描かれている。17世紀の30年代にこのドイツ人がおとずれた当時，モスクワにはポーランド，リトワ，ドイツから流れこんだ軍事専門家つまり外人部隊の将士が1000人あまりも住んでいたという[15]。教会のある地区はドイツ村と呼ばれたが，17世紀の後半になると，ここだけでルター派教会3，カルヴァン派教会2をかぞえた[16]。

カトリックに対する不寛容はイワン雷帝の時代になっても変わらなかった。泥沼の様相を呈したリヴォニア戦争を終わらせるため，1582年にローマ教皇特使アントニオ・ポッセヴィーノ[17]がモスクワへ来て雷帝と会談したさい，付随的に教皇の側からトルコに対する同盟と教会統一が提議された。イワンは戦争の終結には賛成したものの，対トルコ同盟にも教会統一にも消極的であった。またこのときイワンは，ポッセヴィーノがモスクワに住むイタリア人のためにカトリック風のミサを執り行なうことを許したが，カトリックの教会をたてることはみとめなかった。雷帝の子のフョードルがツァーリになってから，王妃の兄にあたるボリス・ゴドゥノフの努力でモスクワに総主教座がもうけられた。1589年のことである。これによってロシア人の意識では，モスクワはローマと対等の地位に立つことになった。国境を接するポーランドやリトワとの政治的対立の激化はロシア人の反ローマ的感情をますます深刻なものとした。モスクワにカトリックの教会がつくられるのはこれから約1世紀，ピョートル治下の1694年まで待たなければならなかった[18]。

さて，ニコラス・メロとその同伴者ニコラスがモスクワに到着したのは1600年の秋から冬にかけてであったらしい。フョードルを継いでツァーリの位についていたボリスの命令で，メロがアンソニー・シャーリイの手から自由にされたことはすでに述べたとおりである。『殉教録』によれば，二人のニコラスの落ち着いた先はミラノ出身のパオロという医者のもとであった。イスファハンからモスクワまではペルシャ使節団に同行してきたのだったが，ここでメロ主従は単独行動をとったことになる。アンソニー・シャーリイとの確執はもはや抜きさしならぬところまできていたとみてよい。

パオロについては W. リヒターの『ロシア医学史』[19]第1巻に簡単な紹介がある。その記事によると，パオロの姓はチッタディーニで，ロシアへ来る前はフライブルグ大学の教授だったこともある。同姓で血つづきのエンリコ・チッタディーニはフランス国王の侍医をつとめ，アントニオ・チッタディーニもヨーロッパ中に知られた医者だったという。リヒターの『医学史』には，1595年4月7日づけでフランス王アンリ四世からモスクワ大公

15) Baron, S. M. *The Travels of Olearius in Seventeenth-Century Russia*, Stanford, 1969, p. 278.
16) Сытин, П. В. *Из истории московских улиц*, М., 1948, стр. 309.
17) ポッセヴィーノは学者としても知られる。医学関係の著述もあった。 cf. *Bibliotheca selecta*, Roma, 1593. その内容は沢野忠安（フェレイラ）を通じて日本にも伝わった。参考，中西 啓，『長崎のオランダ医たち』，東京，1975，28ページ。
18) Nolte, H. -H. *op. cit.*, S. 114.
19) Рихтер, В. *История медицины в России*, ч. 1, М., 1814, стр. 311.

フョードルに送られた手紙の内容が要約の形で引用されている。フランス王はその手紙の中で，すでにかなりの高齢に達したパオロがフランスの宮廷に仕えている親戚や友人たちと逢うためにヨーロッパへ帰る希望をもっていることを伝え，フョードルがもしそれを許してくれるならば，技量ではパオロにひけをとらない医師を代わりに派遣することを約束する，と述べている。フランス宮廷の親戚とは，多分上述のエンリコのことを指しているのであろう。これをみると，パオロはフョードルの侍医だったことがわかる。したがって彼はクレムリンの中に住んでいたことになる。フョードルはフランス王の要請にもかかわらず，パオロを手放さなかったのである。

『殉教録』でメロがパオロの家で新生児に洗礼をほどこしたと述べていることには，ちょっと疑問がなくもない。1595年にすでに「かなりの高齢」（ロシア語訳では **глубокая старость**）に達していたパオロが5年後に子供をもうけたのだろうか。パオロはモスクワで若い同棲者をあてがわれていたのかもしれないし，あるいは生まれたのは彼の孫だったかもしれない。いずれにせよ，このときパオロの家にメロ神父が居合せたのはまことに運命のいたずらだったとしか言いようがない。プロテスタントに許されていることが，カトリックには禁じられていた。幼いチッタディーニがカトリック式の洗礼を受けたことが外部にもれ，ボリスの耳にはいった。ロシア語の論文「イスパニア国の修道士ニコラス・メロ」を書いたピルリングは，モスコーヴィヤ商会のイギリス商人がこの事実をつかみ，アンソニー・シャーリイを通じて当局に密告したのではないかと考えている[20]。この密告の件はむろん冒険譚の中のパリーの手記ではふれられていない。ピルリングによると，ただちに家宅捜査が行なわれ，メロの所持品の中からペルシャ王アッバースからローマ教皇クレメンス八世ならびにスペイン王フェリペ三世に宛てた手紙が発見された。メロは手紙のことをそれまで秘密にしていたようである。アンソニー・シャーリイが洗礼のことと合わせてアッバース王の手紙の件もロシア側に暴露したと考えられないこともない。

カトリック式洗礼と外国国書の秘密所持とどちらが主因であったかは知る由もないが，メロと日本人ニコラスはソロフキ島の修道院に流されることになった。ソロフキはモスクワの真北，直線距離で1000キロあまり，北緯65度に位置する白海の小島である。15世紀の前半に修道院がつくられ，ロシア最北部における布教の中心地の役割を果たした。塩や雲母の採掘と精製，毛皮獣の捕獲，漁業などの経済活動にも積極的に従事し，ロシアで最も富裕な修道院となった。ここの修道院長は聖俗両界の地方権力から掣肘を受けず，伝統的にツァーリによって直接任命されるならわしであった。16世紀からロシア革命後にいたるまで，政治犯や宗教上の異端者の流刑地として知られた。17世紀中葉には修道僧の数は350人をかぞえ，彼らのもとで労働にしたがう俗人の数は600から700人にのぼった[21]。

二人の囚人のいわば請け書にあたる1600年の文書が「イスパニア国修道士ニコラスとその従者の当修道院送りの件」と題されてカザン神学大学のソロフキ文書集に収められていたといわれる[22]。メロの逮捕がいつ行なわれたかはっきりしないにせよ，ペルシャ使節

20) Пирлинг, П. *Указ. соч.*, стр. 73.
21) この数字は *Советская историческая энциклопедия*, т. 13, М., 1971 による。
22) Пирлинг, П. *Указ. соч.*, стр., 74.

団のモスクワ入りの時期から考えて，メロがその年のうちに1000キロもへだたったソロフキ島に到着したはずがない。しかし当時のロシアでは，新年が9月にはじまることになっていた。一方，アンソニー・シャーリイの一行は1601年7月初旬までにメロ流刑の噂を聞いているので，西暦でいえば1601年の3月末ごろまでにメロたちのソロフキ送りが決定ないし実現していたことになる。このソロフキ修道院文書で注目されるのは，イギリス人の記録には一度も姿をあらわさなかった日本人ニコラスが，メロの従者 (человек) として言及されていることである。本来これは公文書の性格をもつので，流罪人の員数についてはとくに手ぬかりがなかったということであろう。

もっともこの文書の名をあげているピルリングも自分の眼でその存在を確認したわけではなく，S. F. プラトーノフからの又聞きであると断わっている。これは有名な歴史家のセルゲイ・プラトーノフ (1860–1933) のことであるらしい。ボリスの治世の末期からはじまる17世紀初頭の動乱時代に関して第一級の古典的業績をのこしたプラトーノフは，この時期にロシアにまぎれこんだ二人の外国人の囚人についても関心をいだいていたことがわかる。

ポルトガルで生まれメキシコとフィリピンで生涯の大半を過ごしたメロにとっても，日本で生まれフィリピンで育ったニコラスにとっても，極北に近い見知らぬ土地での幽閉生活がいかに苦難にみちたものであったかは容易に想像できる。与えられる食事は下僕並みだったというから，メロ神父もここではやせ衰えてしまったかもしれない。それればかりか，彼らはカトリックに敵意をもつ正教会の修道士から絶えず改宗を迫られるという精神的苦痛を味わわなければならなかった。

一方，メロ受難の知らせはローマに伝わっていた。ペルシャ使節団のアンソニー・シャーリイとフランチェスコ会士アルフォンソは，メロの逮捕と流刑をヨーロッパで秘密にしておく必要をみとめなかったであろうし，モスクワに住むカトリック教徒も少ない数ではなかった。教皇庁がこの事件に関心をもったのは当然である。ピルリングによれば，1604年クラクフ駐在の教皇使節ランゴーニはポーランド政府に対してメロの救出方を要請したという[23]。それを受けてポーランド政府は外交ルートを通じてモスクワに働きかけたが，むろん事はすみやかに運ばなかった。

偶然にも，このときポーランド領内にイワン雷帝の皇子の名をかたる野心家がいた。この偽ドミートリイがポーランドの支配層の援助のもと，同国の士族やコサックをひきいてモスコーヴィヤに攻め入ってロシア史上の「動乱」の幕が開くのも1604年のことであった。

4. 「マリーナの日記」から

ボリス・ゴドゥノフが急死してから3カ月目の1605年7月に僭称者ドミートリイがモスクワのツァーリの座についた。『殉教録』はモスクワ大公が世継ぎをのこさずに亡くなったと述べているが，これは明白な誤りである。ボリスの子で16歳のフョードルはこの年の4月半ばから1カ月半ばかりとはいえ，ツァーリの位にあった。しかしフョードルと

23) Там же, стр. 74.

その母親は貴族に煽動された民衆によってつかまり，僭称者の命令で殺されたのである。

偽ドミートリイが即位した翌年の5月2日にかねて婚約中のポーランド貴族ムニーシェフの娘マリーナがモスクワに到着して，その6日後に結婚式が行なわれた。直接メロや日本人ニコラスに関係してはいないが，このころの「マリーナの日記」に日本人という言葉があらわれるので紹介しておこう。もっとも「マリーナの日記」といっても，実際は彼女の秘書官をつとめたポーランド人のオレスニツキが1605年から2年間にわたってマリーナの動静を詳細に記録した文書である。オリジナルはポーランド語であるが，以下ここで引用するのは19世紀になって刊行された逐語的なロシア語訳からの重訳である[24]。

1606年5月5日にクレムリンで宴会がもようされた。マリーナの父親が偽ドミートリイに謁見する儀式のあとで開かれたもので，そこにはワシーリイ・シュイスキイをはじめとするモスクワの大貴族の面々や総主教以下の高位聖職者たちが顔をそろえていた。その日は正教の精進日である金曜日にあたっていたので献立は魚料理が主体で，そのあとワインやビールが出た。酒宴がいまたけなわというときである。

> 弓をもった20人の日本人があらわれた。日本人は北氷洋のほとり，インドの近くに住んでいる。トナカイを乗りこなし，モスクワのツァーリに貢税を納めている。斧を扱うことができるようになると，1人が毎年10匹ずつの黒貂をツァーリに差し出す。このときちょうど彼らは年貢を運んできたのである。彼らは生肉と魚を常食にしている。特定の信仰はもたず，太陽や月や樹木や熊など各自が好き勝手なものを崇拝している。妻には幼女をあがなって，成長するのを待つ。モスクワから日本までの距離は非常に大きいので，馬で行き着くのに丸1年を要する。家というものはなく，数週間曠野の一個所で住むと数十マイルはなれた他の場所に移動するというような暮らし方をして一生涯を過ごす。彼らの日常の娯楽は獣を弓で射ることであり，それによって食料をも得るのである。

さすがにここで描かれる「日本人」の姿が事実とあまりにもかけはなれているのに気づいたロシア語訳の刊行者は，わざわざ注をつけて「おそらくはラップ人であろう」と読者に注意をうながしている。ただし16世紀初頭のモスクワにこのような途方もない「日本観」が存在したという事実だけは否定することができないであろう。

マリーナがモスコーヴィヤの皇妃になってから10日目の早朝，またクーデタがおこる。町中の教会の鐘の乱打を合図にモスクワの市民がクレムリンに乱入して，偽ドミートリイを殺害した。小柄でやせていた17歳か18歳のマリーナは女官のスカートの中にかくれて助かったという[25]。偽ドミートリイに代わって，ワシーリイ・シュイスキイがツァーリの位についた。ムニーシェフとマリーナの父娘，それにポーランドの貴族ら400人ばかりは，8月になってモスクワから北に300キロほどはなれたヴォルガ河畔のヤロスラーヴリに流された。それから1年後の7月，ムニーシェフはニコラス・デ・メロと名のる未知の

24)「マリーナの日記」からの引用はすべて次の刊本による。 Устрялов, Н. *Сказания современников о Дмитрии Самозванце*. ч. 2, СПб., 1859. Дневник Марины Мнишек.

25) 歴史家のソロヴィヨフはこの説をとるが (Соловьев, С. *История России с древнейших времен*. т. 8, М., 1962, стр. 429.)，ピルリングはそれを作り話としている (Пирлинг, П. *Указ. соч.*, стр. 39).

人物から手紙を受取ることになる。それも「マリーナの日記」から判明するのであるが，この手紙について述べるまえに，ソロフキ島の囚人のその後の運命をたどっておかなければならない。

偽ドミートリイはポーランドで正教徒からカトリックに改宗していた。そしてモスクワに君臨したあかつきには全ロシアをカトリック化するという約束をポーランド王ジグムント三世に与えていた。しかし1605年に首尾よくツァーリの座につくと，この約束や領土問題の解決をなかなか果たそうとせず，ポーランドとの関係は円滑を欠きがちであった。マリーナとの結婚が一年以上も延びたのは，それも原因の一つであったらしい。偽ドミートリイが自発的にではなく，またポーランドの要求によってでもなく，たまたまモスクワを通過したカルメル派の修道士（『殉教録』に資料を提供したヨハンネス・タデウス）が伝えたローマ教皇クレメンス八世の要請にもとづいてメロたちの釈放を決めたという『殉教録』の記述は，その点で示唆的である。しかもその決定は即位の直後ではなかった。二人のニコラスがソロフキからモスクワに帰り着いたときには，すでにシュイスキイが政権をにぎっていたからである。シュイスキイ登極の1606年5月は，メロ主従がソロフキに流された1600年の春からかぞえてちょうど6年目にあたっている。

メロらはモスクワでふたたび当局の訊問を受けることになったが，このときも通訳をつとめたのはモスコーヴィヤ商会のイギリス人である。彼らの「奸計」のおかげで二人はまたしてもモスクワから流刑を受けるはめになった。少なくとも，メロ自身はそう感じていたにちがいない。『殉教録』は二度目の流刑地の名をあげておらず，あたかもモスクワに留めおかれたかのように書いているが，二人が流されたのはヤロスラーヴリより50キロほど手前のロストフ，厳密に言えば現在のロストフ市から10キロあまり北寄りのウスチエ川にそったボリソグレープスキー修道院であった。ボリスとグレープという二人のロシア最初の聖者の名を冠したこの修道院は14世紀中葉に開基された古い修道院で，17世紀初頭にはのちに聖者の列に加えられる有名な苦行者イリナルフがここでまだ存命中だった。ピルリングはメロたちがこのイリナルフと親しくなり，その庇護を受けたのではないかとみている。ロストフへはポーランド人貴族も何人か流されていた。メロは彼らを通じてポーランド人ムニーシェフと前モスクワ皇妃マリーナがヤロスラーヴリで軟禁に近い暮らしを余儀なくされていること，しかもムニーシェフ父娘が帰国を望んでいること，を知ったのだった。メロがこのとき一筋の希望の光を見るような気がしたとしても不思議ではない。彼がムニーシェフに手紙を書いた動機は，「マリーナの日記」の記事からも明らかである。なおピルリングはロストフからヤロスラーヴリまで秘密の手紙を届ける手助けをしたのも苦行僧のイリナルフであったろうとしている。以下は「マリーナの日記」の該当部分の引用であるが，（ ）内は刊行者ウストリャーロフの訳注，〔 〕の中は筆者の加えた注である。

1607年7月12日　アウグスティノ会のスペイン人修道士ニコラス・デ・メロが知事閣下〔ムニーシェフはポーランドでサーンボル州の知事に任じられていた〕の手にわたるよう，ひそかにわれわれに手紙を届けてきた。この修道士は神のみ言葉の宣布者として20年あまり東インドに滞在し，のちにはその地のすべての宣教師たちの頭になった

人物である。教皇とスペイン王の命令によって東インドから戻る途中，彼はペルシャの王(シャー)のもとに立ち寄った。そこで快く迎えられ，王から教皇とスペイン王への手紙を託された。戦争による混乱のために〔これは他の資料にはみられない理由である〕，ペルシャから海路をとることができなかったので，彼は王やその他の君主たちから与えられた通行証をたずさえ，ロシア経由で帰国することにした。それはボリス・ゴドゥノフがツァーリだったころである。ローマの教えとその伝道者にとっては不倶戴天の敵であるロシア人は，ニコラス・デ・メロから取り上げた手紙を読んで，ペルシャ王がカトリックの教えに信服していることを知り，このような強大な君主がカトリックに帰依して自分の領土全体にこの教えを拡めることがないよう，この修道士に重い枷をはめ，ソロフキの町に流した。ボリスの死後，ドミートリイはこの信心深い人物のことを知り，スペイン王への使いを委任するつもりで，ただちに彼を釈放してモスクワに連れてくるように命じた。この修道士がモスクワへの旅の途上にあったとき，不幸な変事〔偽ドミートリイの殺害〕が起こった。シュイスキイの命令によってモスクワへ連れ戻された修道士は，モスクワ在住のイギリス人の通訳を通じて，ツァーリと貴族会議(ドゥーマ)に属する貴族たちに自分の任務を説明した。その説明を聞いてから，カトリックの信仰とスペイン国民の大敵たるイギリス人の差し金で，ツァーリはふたたび修道士に枷をかけるように命じ，ロストフから3マイルはなれたボリス修道院〔正確にボリソグレーブスキイ修道院〕に流すように命じた。そこからこの修道士は知事閣下あてにフランス語で書かれた長い手紙を送ってきたのである。彼はこの手紙の中で現在のいたましい境遇を述べ，アメリカ，インド，ペルシャでカトリックの信仰のためにたてた功績をかぞえ上げ，知事閣下が祖国に帰還したあかつきには，カトリックへの自分の貢献がいかに大きなものであったか，教皇を通じてスペイン王に知らせてくれるよう依頼していた。この修道士の心のやさしさは，自分といっしょにスペイン宮廷へと旅立ち，同じ災難に逢着した富裕で名門の家柄の若いインド人〔日本人ニコラスのことにちがいない〕の釈放について心をくだいているところからも察しられた。ロシア人が彼にカトリックの信仰を捨てさせ愚にもつかぬ自分たちの信仰（ギリシャ正教・ロシア正教の信仰は常に真実で純潔であり，救世主キリストの教えの精神に忠実にしたがっているので，私はここで悪意とファナティズムに目のくらんだ異教徒の不遜な言辞に反駁するまでもないと考える）を受け入れさせようとしてあらゆる苦しみをなめさせつつあるにもかかわらず，彼の心がびくともゆるがないのは，その信仰の深さを物語るものである。この手紙といっしょに，ロストフにいるアンドレイ・スタドニツキ〔ロストフ流刑中のポーランド貴族〕からの報告も届いた。彼はポーランドで起きた王と貴族たちのあいだの不和を知らせてよこした。この知らせはわれわれの悲しみをつのらせた。

それから3カ月あまりして，ふたたびメロから手紙が届いた。この手紙ではもはやメロの一身上の記事は姿を消し，もっぱら動乱時代のロシアの政治情勢が語られている。幽囚の身の外国人でありながら，彼がこれほどクレムリンの内情や内戦の戦況に通じていたのは驚くべきことである。「マリーナの日記」もずいぶんくわしく書きとめたものであるが，煩をいとわずメロの手紙に関する部分の全文を引用しよう。この時期，メロの運命は日本

人ニコライの運命でもあったのだから。

1607年10月〔日づけなし〕　上述のデ・メロ神父から送られた手紙の内容をここに載せておく。この手紙には5月〔7月の誤りか〕12日以後の諸事件が忠実に述べられていた。その内容は次のとおり。

カルーガ付近にとどまっていたツァーリ・ドミートリイ〔二人目の偽ドミートリイのこと〕の軍隊がシュイスキイの軍勢と戦闘を行なった。双方の損害は甚大で，ドミートリイは6000人を失い，シュイスキイは1万3000人を失った。戦闘の指揮をとったのはドミートリイ側ではゲトマン〔コサックの首領〕イワン・ボロトニコフである。激戦の結果，軍人と僧侶を含むシュイスキイ側高官の多くが戦勝者に降参した。その中にはドルゴルーキイ公，アンドレイ・テリャテフスキイ公，それに〔初代の偽〕ドミートリイのもとですべての国務を管掌していたある非常に名門の高官（名を秘しているが，おそらくはグリゴーリイ・シャホフスコイ公のこと。彼は偽ドミートリイの寵臣で，ワシーリイ・シュイスキイの治世には北部地方で戦った）が含まれていた。その後もボロトニコフはシュイスキイと何回も戦い，つねに勝利をおさめた。ツァーリ・シュイスキイの連戦連敗を見かねた10人の名門の貴族が彼のもとに伺候して，彼の統治のもたらした災厄，信じがたいほどの流血，国土の荒廃，国民全体の不満などを述べたて，その結論として，貴族のある者は公然とツァーリを敵にまわすであろうし，またある者は敵に降伏するつもりになっているし，第三の者はひそかに敵に内応しており，今でもツァーリに忠実な者も愛や忠誠のゆえではなく，自分の財産や家族を安全に保ち，自分自身や兄弟たちをおびやかしている災難をさけるのが目的であると語った。結局貴族たちはツァーリが剃髪して修道僧となり，正義によって彼の代わりに立てられる人物に帝位をゆずることを説き伏せようとしたのである〔3年後にシュイスキイは退位する〕。これを聞いて立腹したシュイスキイは彼らに枷をかけ，その領地を没収するように命じた。他の貴族たちは正義や諫言をもってしては埒が明かないと見て，この圧制者とその一味に対する脅迫状をばらまきはじめた。差し迫った危険を取り除くためにシュイスキイは側近の助言にしたがって，自分の血縁につながる総主教〔ゲルモーゲン〕の名前で布告を発し，その中で〔死んだ〕ツァーリ・ドミートリイに罵詈雑言をあびせかけ，もともとこの男は帝位につく権利などもたなかったと断じて，傲慢にも彼を破戒僧グリーシカ・オトレーピエフと呼んだ。ボリス・ゴドゥノフの悪企みで子供のうちに殺されたドミートリイの名前を僭称したというのである。さらにシュイスキイは総主教の名をかりて，次のように書いた。すなわち本物の皇子のなきがらは盛大な儀式とともに首都に移され，衆人環視の中で祖先の遺骸のかたわらに埋葬されてさまざまな奇蹟，とくにめくらやびっこや病み衰えた者たちを治癒させるなどの不思議をあらわしていること，この奇蹟を信じない者はだれでも教会から破門されること，狡猾にも皇位を簒奪しラテンの信仰の頭目たる教皇に加担したかどで去年モスクワで殺された破戒僧をドミートリイとみとめる者も同じく正教会から破門されるであろう，云々。ついでにカトリックの信奉者に対しても，恥ずべき流言をとばすと罰を与えると侮辱的な脅し文句が並べられていた。その上，第二の偽ドミートリイの一味郎党はすべて破門され，ボロトニコフとすべての反

逆者たちは呪詛をうけたとも書かれていた。シュイスキイはこの布告を発すると同時にそれを国中に送って，聖なる信仰の敵との戦いに自分を助けてたち上がるように呼びかけ，従わぬ者は死刑に処すると宣言した。武器をとり得る修道院の下僕たちも出陣すること，修道院の家禽は食料として首都あるいは戦場に供出することも命じられた。修道僧ですら，要求があり次第一人のこらず信仰のために武器をとれるように準備せよと命じられた。こうしておいてからシュイスキイは自ら軍隊をひきいて出陣し，セルプホフの近くまで来たとき，勝利を収めてモスクワに凱旋するか，さもなければ戦場に首を横たえるという誓いを立てた。ボロトニコフは相手の兵力を知るとただちにペトルーシカ〔コサックの首領〕と合流し，安全を期してカルーガからトゥーラに移った。そしてこの堅固な町をさらに武装し，6年分の糧食を確保してから，シュイスキイ軍に対して出撃して戦い，勝利を得た。ツァーリは退却を余儀なくされたが，誓いを破ることをはばかり，また首都で新しい不幸のおこることを恐れて，一味の助言にしたがってモスクワに帰ろうとはしなかった。ボロトニコフはカルーガから出陣する前にすべての囚人たちを釈放し，彼らに〔二代目〕偽ドミートリイへの忠誠を誓わせた。一方，シュイスキイはモスクワから出征する前日，アントニイと二人の医師ダヴィドフとクリシトフ（おそらくダヴィド・ファスマー〔ドイツ人〕とフリストフォル・ライトリンゲル〔ハンガリー人〕のことであろう）に枷をかけるように命じていた。それは味方が大きな戦果を収め，逆に敵が敗れたといういつわりの知らせをひろめてモスクワ中を喜ばせ，味方の士気を高めるためであった〔このあたりの因果関係はよくわからない〕。

メロの手紙の中には，ポーランドからプチーヴリへエリオマグ隊長が到着したとも書かれていた。彼の語るところによれば，シュイスキイはポーランドの兵力を分散させるためにタタールとスウェーデンをポーランドと戦うように仕むけ，事実両国の軍勢はポーランドの国境内に攻めこんだが，その侵入は失敗におわったという。タタール軍は追い散らされ，スウェーデン軍は潰滅したのである。これはポーランドがドミートリイの即位を助けていない証拠とも受けとれる。手紙の末尾でニコラス・デ・メロはわれわれの知事閣下の友人であるモスクワの貴族フョードル・クニャジニーンとひそかに会見した旨を知らせてよこした。18日前にこの貴族がプチーヴリを出発したとき，9000の軍勢を擁するツァーリ・ドミートリイはシュイスキイに手紙を送り，このような大軍をもってすれば武力で帝位を手に入れることも容易であるが，正当な帝位継承者としてキリスト教徒の血を無慈悲に流すことはしのびないので，シュイスキイが手遅れにならぬうちに自発的に帝位を退き，君主の慈悲にわれとわが身をゆだねるように勧告したということである。この手紙をもって派遣された使者はまずトゥーラに立ち寄り，それからモスクワにあらわれて多数の貴族や兵士たちのいる前でシュイスキイに4通の手紙を渡した。この使者は返書をもってプチーヴリに帰された。その間，敵味方とも平穏をたもっていた。最後にニコライ・ド・メロはくだんの貴族の言葉として，上述のエリオマグ隊長がドミートリイのもとへ1万2000のタタール勢をひきつれてきたと述べ，一方どんな朗報を耳にしても絶えず悲しみにしずんでいるアンドレイ・スタドニツキの大げさな愁嘆ぶりも知らせてよこした。

「マリーナの日記」には収められていないが，ピルリングによると，1608年2月7日にメロの第三の手紙がヤロスラーヴリに届けられた。そこではシュイスキイの政府軍によってトゥーラが陥落し，モスクワに迫っていた反乱軍の頭目ボロトニコフが捕えられたことを報じているほか，ムニーシェフがポーランドに帰着し次第メロ主従に救援の手を差しのべてくれるよう懇願しているという[26]。

メロがこれらの手紙をポーランド人に書き得たことから判断すれば，少なくともこの時期には彼と従者のニコラスがそれほど苛酷な条件のもとで監禁されていたとは考えられない。それどころか，奇怪なことに，メロはムニーシェフと気脈を通じていたモスクワの貴族と会って戦況の機微にふれる情報を得たりしている。むろんメロの同情は死んだ偽ドミートリイや生きている僭称者二世とポーランドの側にある。二人の囚人が「獄舎の中でも一番暗い部屋にとじこめられ」，しばしば拷問や侮辱を受けていたという『殉教録』の記述とはうらはらに，メロは錯綜した情勢の中で反モスクワ的な政治的策謀に加担していたという見方さえ成り立つであろう。

概して聖者伝や殉教の記録がたとえ事実のみを記述しているにせよ，すべての事実がそこに記述されていないことも確かである。言うまでもなく『殉教録』にも幾分誇張があろう。あるいはまた，ムニーシェフやマリーナをはじめとするポーランド人の一行がヤロスラーヴリを去った1608年5月以後に，ロストフのメロたちの事態が一変したとも考えられる。いずれにしても1608年のはじめごろから1610年にかけての2年ほどは，二人のニコラスに関する文証はとぎれているのである。

5. 二つの殉教

『殉教録』の記述が正しいとするならば，メロと日本人ニコラスがニージニイ・ノヴゴロドに移されたのは1606年から4年後，つまり1610年のことである。しかし彼らがいかなる状況のもとで，なぜこの町に移されたかはわからない。

ピルリングの伝えるところによれば，レストヴィーツィンなる人物が著わした『ボリソグレープスキイ修道院におけるサピエハ』という本の中に次のような記述があるという[27]。サピエハとは偽ドミートリイ二世の陣営の大立物，リトワの貴族ヤン・サピエハのことである。

> メロは，彼といっしょにロシアへやってきてモスクワにとどまっていたインドの貴族（ラジャ）の息子のとりなしで幽閉をとかれ，モスクワに戻った。しかしまもなくそこで死んで埋葬され，一方彼と同行してきた人物はポーランドへ去った。

この記事では，メロは一人でロストフに流されたことになる。しかしこれはムニーシェフあての手紙でメロが同伴者の「釈放について心をくだいていた」という「マリーナの日記」の証言と矛盾する。多分レストヴィーツィンの誤りであろう。しかしその「マリーナの日記」でも同伴者はインドの名門貴族の息子となっていたし，さらに1606年の「マリ

26) Пирлинг, П. *Указ. соч.*, стр. 78.
27) Там же, стр. 82.

ーナの日記」では「日本」はインドのそばにあると書かれていた。16世紀初頭のロシア人にとってインドとは，アジアの東部全体を指すかなり漠然たる概念であったようである。むろんメロがモスクワで病死したということも，日本人ニコラスがポーランドに去ったということも，信じがたい。

1610年のロシアは依然として動乱のさなかにあった。偽ドミートリイをたおしてツァーリとなったシュイスキイはますます苦境におちいりつつあった。ボロトニコフはやっとつかまえたものの，二人目の偽ツァーリ・ドミートリイはモスクワ郊外のトゥシノを根城とし，ポーランド人やコサックばかりか一部のロシアの貴族たちまで味方に加えて，首都周辺のかなりの部分を支配していた。上述のサピエハは1608年の秋から大軍をひきいてモスコーヴィヤの北部地方に進撃し，まずロシア正教の有名な聖地トロイツェ・セルギエフ修道院を包囲した。ウラジーミル，スーズダリ，ペレヤスラーヴリなどの諸都市は次々と「トゥシノの盗賊」に臣従の誓いをたてることを強要された。ロストフの町も戦闘の末トゥシノ派の手に落ちた。ロストフ府主教のフィラレート・ロマノフはトゥシノに拉致され，本人の意志に反して彼らの陣営でロシア総主教と宣言される。ボリソグレープスキイ修道院のイリナルフは外国の軍隊と結託したトゥシノ派に反対の立場をとっていた[28]。イリナルフのもとにいたメロたちは，この激動の日々をどのように過ごしていたのであろうか。可能性としては，トゥシノ派の大軍がモスクワから北を席巻したこの時点で，メロたちは同じカトリックの信仰につながるサピエハによって救出される事態もありえた。なぜか，そういうことにはならなかった。あるいは，サピエハ軍の接近にそなえてメロたちはニージニイに送られたのかもしれない。モスクワの東に位置するこの町は，ポーランドやコサックの侵入から最も安全なところであった。

1609年にシュイスキイは大きな譲歩をしてスウェーデン王カルル九世の援助を得，多少とも勢力をもりかえすかにみえた。その年の末に偽ドミートリイ二世はトゥシノからカルーガに遁走したが，翌年の夏にはふたたびモスクワに迫った。形勢は流動的であった。ポーランドは王子ウワディスワフをモスクワのツァーリの座にすえることを策し，大軍を出動させていた。この情勢の中でシュイスキイは1610年7月に貴族たちによって帝位を追われ，強制的に剃髪させられて修道僧となった。代わって七人の大貴族が政権を掌握する。秋にはジョルキエフスキひきいるポーランド軍がモスクワにはいった。12月になると偽ドミートリイがカルーガで殺される。このような目まぐるしい政治情勢のさなか，だれがどんな目的でロストフ郊外に監禁された異邦人のことを思い出したのであろうか。

翌年の1611年になっても混乱はつづいた。モスクワはポーランド軍に占領されたままであった。彼らの掠奪や暴行にたえかねて，春にモスクワの民衆は暴動をおこす。総主教ゲルモーゲンの呼びかけで，首都解放のための国民軍も組織された。その指導者は全国会議（ゼムスキイ・ソボール）で選ばれた二人の貴族とコサックのザルツキイであったが，この三頭政権（トロイカ）は内紛のためにたちまちつまずいてしまう。第一次国民軍はついえても，反ポーランドの感情は国中にみちていた。そして第二次国民軍の結成にあたって最も顕著な役割を果たすのがニージニイ・ノヴゴロドである。

28) Тальберг, Н. *Святая Русь*, Париж, 1929, стр. 50.

1611年9月にニージニイの町の商工業地区(ポサード)共同体の長老に肉屋のクジマ・ミーニンが選出された。ミーニンはロシアから外国軍を一掃するために新しい国民軍を組織することを提唱し，市民からまず軍資金を徴集した。ミーニンにこのような行動をとらせた直接的な契機はゲルモーゲンのアピールであった，と歴史家プラトーノフは推定している[29]。ゲルモーゲンは前年の末以来ポーランド軍によってクレムリンに閉じこめられていたが，彼の呼びかけはニージニイにも伝えられていた。さらに1611年の夏には，ニージニイ出身のロジオン・モセーエフなる人物がとらわれの身の総主教と面談し，ポーランド軍に対する糾弾とコサックの脅威への警告を含むゲルモーゲンの手紙をニージニイの町にもたらした[30]。ミーニンは長老に就任する前から，すでに期するところがあったにちがいない。ポサードの代表は，モスクワから派遣されている役人はもとより，ニージニイの貴族層や聖職者より低い身分とされていたが，ミーニンの強烈な個性に魅せられたかのように，全市がこぞって彼の提案を支持した。

ニージニイから近隣の町々に檄がとばされ，貴族のほかヴォルガの川ぞいの町民や農民たちもこの国民軍に加わった。指揮官には名門貴族の末裔であるドミートリイ・ポジャールスキイ公を招くことになった。すでにその年の春第一次国民軍の一員としてポーランド軍と戦った経験をもつ軍人である。彼は負傷して，その時スーズダリの領地で療養中であった。このポジャールスキイがニージニイにあらわれるのが10月の末である。準備をととのえた国民軍は翌年3月にニージニイを出発し，ヴォルガ川ぞいにヤロスラーヴリまで進み，そこから南下して10月にはクレムリンにたてこもるポーランド軍を降伏させる。

日本人ニコラスの殉教の舞台となるのは，まさに1611年秋のニージニイであった。実は彼にとってこの町ははじめての場所ではなかった。ペルシャ使節団にまじって11年前の秋にヴォルガをここまでさかのぼり，ひと月ほど滞在したことがあったからである。しかし町の雰囲気はそのときとは全く異なっていた。国民軍の組織が大急ぎですすめられ，町全体が反ポーランド的気分でわきかえっていたことであろう。ポーランドに対する敵意は，すなわちカトリックへの反感であった。

日本人助修道士ニコラスに改宗を強要したり，斬首の命令を下したりしたのがワシーリイ・シュイスキイであるとする『殉教録』の記述が誤りであることは，あらためて言うまでもあるまい。前述のように彼はすでに1610年の夏にツァーリの位を追われているからである。ロストフからニージニイへ二人のカトリックの囚人を移したのもシュイスキイ以外の人物であろう。私としては，流刑地の変更をふくめてニコラスに対する拷問と処刑という一連の過程は，反ポーランド感情の醸成ならびにミーニン=ポジャールスキイの国民軍結成と無関係ではありえない，と考える。俗な表現を用いるならば，イルマン・ニコラスは国民軍出陣の血祭りにあげられたのではあるまいか。

殺されたニコラスの遺骸はポーランドの商人たちが埋葬した，と『殉教録』はいう。もちろんその商人たちはカトリック教徒であった。もしそれが事実とすれば，当時ニージニイの町にもポーランド人が住んでいたことになる。このことは，ニコラスの処刑の理由が

29) Платонов, С. *Очерки по истории Смуты в Московском государстве XVI-XVII вв.* М., 1937, стр. 401.
30) Там же, стр. 370.

単にカトリックであったことではなかったことを示している。戦闘的気分のみなぎったニージニイにおいても，すべてのカトリック教徒が殺されたわけではないのである。ニージニイがロシアの町々の中でも宗教的に格別不寛容な土地柄ではなかったという傍証もある。16世紀の末リヴォニア戦争で捕虜になったルター派の新教徒の一部がイワン雷帝の命令でここに移住させられ，公然と新教の礼拝を行なうことが許されていた。1636年の7月にこの町を通過したオレアリウスは，ルター派教会の会衆がまだ100人ほどいると報じている[31]。彼らのある者はツァーリの軍隊に勤務し，他の者はウォトカやビールの醸造と販売などに従事していた。

かつてボリス・ゴドゥノフが二人のニコラスをソロフキ島に流したときの罪状は，第一にパオロ・チッタディーニ家の嬰児にカトリック式の洗礼をほどこしたこと，第二にペルシャ王アッバースからローマ教皇とスペイン王に宛てた書簡をかくしもっていたこと，の二点であったらしい。そのうち洗礼は神父であるメロのみがとり行なえる秘蹟である。外国の国書の所持の点でもメロがいわば正犯であることは明白であった。ソロフキ修道院の囚人請取状では「イスパニア国修道士ニコラス・メロとその従者」という表現が用いられていた。ロストフの修道院でポーランド貴族と連絡をとり合ったのもメロである。それなのになぜ「従者」ニコラスが殺されたのか。洗礼の件はさておき，メロはロシアの利益をそこなうかもしれぬ国際的な「陰謀」にかかわる密使として，依然生かしたまま抑留するに値する人物であり，さらにロシア側に寝返った場合には貴重な情報を提供し得る人物とも評価されていたのではあるまいか。とすれば，日本人ニコラスの処刑にはメロへの見せしめという意味があったかもしれない。

とにかくメロは殺されなかった。『殉教録』によれば，彼はポーランド人のとりなしで獄舎に戻され，さらにニージニイの町にとどまる。やがて国民軍が出陣して，町は平静を取り戻す。日本人ニコラスの死から一年後に，思いがけない邂逅があった。マリーナ・ムニーシェフとめぐり会ったのである。

話は前後するが，1608年7月にツァーリのワシーリイ・シュイスキイとポーランド王ジグムントのあいだに一時的な和議が成立した。その条件の中には，ロシア側がムニーシェフとマリーナを釈放すること，一方ムニーシェフは例の「トゥシノの盗賊」偽ドミートリイ二世をツァーリとみとめないこと，娘を彼と結婚させないこと，マリーナがモスクワの皇妃と名のらぬこと，などの条項が含まれていた。このころモスクワの町をとりまく土塁を西北の方向にほんの数キロ出はずれたところに，トゥシノの陣営があった。トゥシノ派は自らがいただくツァーリこそ1605年から1606年にかけてクレムリンに君臨しマリーナと結婚した当の人物であると主張していた。そうであるからこそ，シュイスキイはマリーナがふたたびこの僭称者と共同行動をとることを恐れたのである。ムニーシェフの一行はシュイスキイ軍の護衛のもと迂回路をとってポーランドへ向かうが，結局偽ドミートリイ軍にとらえられてトゥシノに連行される。ムニーシェフ自身がつかまることを望んでいたふしもある。マリーナはこのドミートリイを見て最初は失望したといわれるが，まもなく秘密結婚して彼の妻となった。偽ドミートリイ二世は人格も識見も一世に劣り，トゥシノ

31) Olearius, A. *op. cit.*, S. 338; Baron, S. H. *op. cit.*, p. 293.

の陣営の中で重んじられていなかった。ポーランド当局にも見放され，1610年にモスクワの南に逃げ，そこで仲間の手にかかって殺されたことは上述のとおりである。そのときマリーナは彼の子供を宿していた。翌年彼女はトゥシノ派のコサックの首領イワン・ザルツキイと三度目の結婚をした。偽ドミートリイ二世の子供はイワンと名づけられた。

1611年のはじめにザルツキイは一転して第一次国民軍に加わって三頭政権の一角をにない，貴族代表のリャプノフが殺されてからは首班の座を占める。ニージニイで結成された第二次国民軍に対しては微妙な態度をとった。表面上は敵対を避ける気配を示しながら，ポジャールスキイの暗殺をねらっていたといわれる。しかしザルツキイのコサック軍も国民軍の着実な進軍をはばむことはできず，モスクワ郊外の本営を引きはらって南のドン上流地方に去った。それにしてもニージニイの獄舎のメロはどのようにしてマリーナのもとにおもむくことができたものであろうか。

1613年にはザルツキイの一党はアストラハンの町にいた。ピルリングによると，マリーナと「皇子」イワンの周囲には三人のカトリックの僧たちがいた。マリーナのモスクワ入り以来彼女と運命を共にしてきたベルナルド会士アントニイ，かつてペルシャに派遣される途中偽ドミートリイ一世にローマ教皇クレメンス八世からのメロ釈放の要請を伝え今やヨーロッパに帰るためカスピ海をわたってきたカルメル会士ヨハンネス・タデウス，それにニージニイから加わったアウグスティノ会士メロである。マリーナの縁つづきでポーランドからつきそってきたバルバラがメロに心服してアウグスティノ会にはいったのはこのときである。

外国軍の去ったモスクワでは1613年に全国会議が召集され，ロマノフ家のミハイルがツァーリに選ばれた。国内の治安を回復するため，政府は各地に軍隊を派遣する。1614年にはアストラハンにも政府軍がヴォルガをくだって接近した。偽ドミートリイ二世とマリーナの子イワンはミハイル・ロマノフと並んで新しいツァーリの候補にのぼったことでもあり，あらたに僭称者となる可能性があったので，モスクワの政府は追討をいそいだのである。窮地におちいったザルツキイはペルシャ王アッバースに援助を乞う使者を送った。亡命の許可を求める気持があったことは，『殉教録』からうかがうことができる。メロもアッバース王とは面識があったが，つい最近までペルシャにいたタデウスのほうが使者に同行した。二人のニコラスの消息がまがりなりにもヨーロッパにもたらされるのは，このタデウスを通じてである。

政府軍に呼応してアストラハンの町でもコサックの支配に対して民衆が蜂起した。1614年5月ザルツキイとマリーナは数百人のコサックをしたがえてアストラハンを出た。彼らはカスピ海を北岸ぞいにすすみ，ウラル川にはいった。当時この川はヤイークと呼ばれていた。その下流の「熊の島」Медвежий остров という中州で，ザルツキイ軍は急追してきた政府軍によって包囲された。翌6月25日，コサックたちは抵抗をあきらめ，隊長ザルツキイとマリーナ親子を引き渡して，自らはモスクワのツァーリに忠誠を誓った。

その年のうちにザルツキイと「皇子」イワンはモスクワで処刑された。「皇妃」マリーナはモスクワ郊外にあるコロムナの城塔に幽閉中に没したといわれる。一説ではマリーナはアントニイ神父とともに川に投げこまれて溺死したというが，これは信憑性が少ないと

される[32]。

メロとバルバラが火刑にされた場所はわからず，年代にも1614年（『殉教録』）と1616年（『極東におけるアウグスティノ会宣教師』）の二説があることはすでに述べたとおりである。ザルツキイ一味の命脈の絶えたのが1614年であることを考えれば，前者のほうが事実に近いような感じがする。「熊の島」での最期ということもあり得たのではないか。この年の春にペルシャに去っていたタデウスがいかにして二人の殉教のもようを知り得たかも疑問である。

6. 後　日　譚

『殉教録』やその他の教会関係の記録は別として[33]，ロシア側の資料や「マリーナの日記」，それにシャーリイ兄弟の冒険記録などから見る限り，日本人ニコラスはメロ神父の影のような存在に終始したという印象を受ける。

それでは彼はロシアに何の痕跡ものこすことなくおわったのであろうか。これについては最近のソビエトの日本研究家 K. チェレフコ氏の意見を紹介しておくのが有意義と考える。『極東の諸問題』誌1977年3月号に掲載された論文「日本についての最初の情報はいかにしてロシアに入りこんだのか」の中で，氏は「このニコラスこそが私たちの知る限りロシアにおける最初の日本人である」として，次のようにつづけているのである。

> ソロフキの修道院で日本人ニコラスは周囲のロシア人たちに自分の国のことを話して聞かせたことであろう。だが，それについて正確なことは今のところ何ひとつわかっていない。ここで興味ぶかいのは，ヨーロッパ・ロシアの北東部の分離派教徒たちのあいだで，トポーゼロ僧庵の修道僧マルコと，ホロームの森に住む分離派教徒の一人が日本国（オポーニア）まで旅をしたという伝説が生まれたことである。筆者の考えでは，これはこの地方で，アルハンゲリスクを通じて西ヨーロッパから得られたマルコ・ポーロの情報と，当地に住んだロシア最初の日本人ニコラス，ならびにカムチャトカや沿アムール地方およびその近くの島々を探険した最初のロシア人たちから得られた日本についての知識がまざり合ったもののようである[34]。

19世紀に歴史の表面にあらわれた「オポーニア」伝説についてはすでに別の場所で書いたことがあるので[35]，ここではふれないでおく。この伝説の成立にイルマン・ニコラスが一役買った可能性をみとめようとするチェレフコ氏の意見に，私も賛成したい。彼ニコラスはソロフキの修道院に六年，ロストフのボリソグレープスキイ修道院に四年，さらにニージニイ・ノヴゴロドで一年をすごした。モスクワにも前後二回滞在した。この間に多少ともロシア語を理解するにいたったにちがいない。表現能力もついたことであろう。ニコ

32) Пирлинг, П. *Указ. соч.*, стр. 68.

33) 片岡弥吉，『日本キリシタン殉教史』，東京，1979，にはニコラスの場合のような国外での殉教は含まれていない。念のため。

34) 日本語版『極東の諸問題』誌の表現を若干変えたところがある。たとえば，イルマン・ニコライをニコラスと書き改めた。

35) 拙稿「日本国白水境探求——ロシア農民のユートピアについて」，金子幸彦編，『ロシアの思想と文学』，東京，1977，509-537ページ。

ラス自身は日本生まれとはいえ，幼いときにフィリピンにわたっているから，日本についての彼の知識は両親からの聞きおぼえであろう。「オポーニア」伝説の眼目は，日本で古い姿のキリスト教が栄えているということである。日本におけるキリシタンの教勢の発展については，成人してからマニラで伝聞することもできた。彼の幾分あやふやな知識がおぼつかない舌の仲立ちでロシア人につたわり，ある特別な状況のもとで伝説を生む種子となり，それが彼の死後半世紀たってからおこるロシア教会の分裂という土壌で芽をふき花を咲かせた可能性を全く無視することもできまい。

ついでに言及すれば，さまざまな旅行記録を平易に解説した S. マルコフ氏の『地球』（モスクワ，1966年刊，再版1971年）という本の中でもメロと日本人ニコラスのことが取り上げられている[36]。この著者もやはり「ゴドゥノフ時代のロシア人がメロからメキシコ，日本，フィリピン等々について知識を得たことは疑いがない」と書いている。ただ，「モスコーヴィヤの不良客」というその標題から察しられるように，マルコフ氏の筆致は旅の途上で信仰のために命をおとした不幸な外国人に対する同情を全く欠いている。二人のニコラスを，動乱時代に一攫千金を夢みてヨーロッパから押しよせた野心家たちと同列に置き，スパイ扱いまでしている[37]。これもまたひとつの偏見といわなければならない。

本稿執筆にさいしては，『世界を歩いた切支丹』の著者フーベルト・チースリク師から殉教録関係の史料をお借りしたり，カトリックの教会用語についてご示教を得たりした。私が日本人ニコラスの存在を知ったのも，上述の師の著書に収められた一章「ロシアに散った花 イルマン・ニコラス」を通じてである。また拙稿中ラテン語の文章については渡辺金一氏と故浅野勝正氏，スペイン語については井川直美さんのお世話になった。この場をかりて，これらの方々に心からお礼を申し上げたい。

追　　記

拙文脱稿後，あらたに資料を入手したのでいささか補筆したい。1670年にホールモゴルィの修道院で筆写された「世界誌」と称される地理学書がある。原題は **Космография, … сиречь описание сего света земель и государств великих**（世界誌，すなわち世界の諸地方および別強の記述），1878-81年ペテルブルグ刊。全部で76章の中にヨーロッパはじめ世界諸国についての紹介を収め，その第70章に日本に関する記事を含んでいる。そこには日本の地理的位置，気候，動植物，政治，産業，宗教などが簡潔に記述されているが，さしあたり本稿のテーマとの関連では，「かつてノブヌンガ〔信長〕が日本全国を支配していたが，現在の支配者（ロシア語ではツァーリ）はタイコウサマである」という一節，ならびに1596年に日本の都市 **Фиансо** をおそったという地震への言及が注目される。

36) Марков, С. *Земной шар*, М., 1966, стр. 329-334.

37) マルコフ氏は，メロがロシアに関する情報を収集するために意識的に北まわりのコースをとったと考えている。しかしこの説には同意しがたい。念のために同書の記述の誤りを指摘しておく。マルコフ氏はパーカーの著書『中国』によるとして，日本人ニコラスがフィリピンに息子をのこしてきたこと，その子が成長して Коксинга 国姓爺，すなわち鄭成功となったと書いているが（*Указ. соч.*, стр. 332），これは鄭成功の生年が1624年であることを考えれば，明らかにパーカーの読みちがいである。cf. Parker, E. H. *China. Her History, Diplomacy and Commerce*, L., 1901; *China Past and Present*, L., 1903.

この「世界誌」の大部分は地図学者として知られるフランドルのメルカトルの著書の翻訳であることを刊行者ニコライ・チャルイコフが考証しているが（上掲書序文），日本関係の上記の個所に関する限り，メルカトルからの引用ではありえない。彼の著書は16世紀の60年代に刊行されたものだし，彼自身も1594年に没しているからである。一方太閤秀吉も1598年に世を去っているので，上述の記事は1597年にフィリピンを出発したメロとその従者ニコラスのもたらした情報にもとづく可能性がきわめて高い。

なお「世界誌」は元来モスクワで編纂され，ホールモゴルィでは原本から筆写されたにすぎないと推定されているが（同上，стр. 43），北ドヴィナ川の最下流というこの修道院の位置も無視できない。第一に，それは白海への出口にほど近く，したがってメロたちが六年間を過ごしたソロフキ島からも遠くなかった。日本についての最新の物語は彼らの流刑地でロシア人に伝わったとも考えられる。第二に，ホールモゴルィを含むいわゆる「ポモーリエ」の地（沿岸地方）は17世紀の末以後分離派教徒の活動の一中心地となる。「白水境」伝説が成立するのもこの地方であるらしい。そのさい「世界誌」に盛られた日本についての記事が大きな役割を果たしたことはほとんど疑問の余地がないように思われる。

やはり脱稿後，メロが加わったペルシャ使節団の旅行記録の一部がモスクワ大学ロシア史協会報告集 Чтения в Обществе истории и древностей российских の1899年第1号に訳載されていることを知った。著者はそのときのペルシャ使節フセイン・アリベークの随員として，モスコーヴィヤをヴォルガの河口から北端のアルハンゲリスクまで縦断したウルフ・ベークという人物である。彼はスペイン滞在中にカトリックに改宗して，ペルシャへはついに帰らなかった。そして母国の歴史とスペインまでの自分の旅についての記述をペルシャ語で書き残したのである。

この記録は A. シャーリイの「冒険譚」とは別の角度から，使節団の編成やそのロシアでの動静，さらにロシアの国土とそこに住む人々の風俗を詳述していて貴重な資料である。メロにも随所で言及しているが，残念ながら日本人ニコラスについては何も述べていない。16世紀末から17世紀初頭にかけてペルシャとロシアの関係は友好的であり，使節団の交換も活発に行なわれていたことも本書からうかがわれる。もうひとつ注目されるのは，ウルフ・ベークがこの使節団のイスファハン出発を1599年7月9日，モスクワでのツァーリとの謁見を同じ年の11月，さらにアルハンゲリスク出港を翌1600年7月9日と明記していることである。つまりシャーリイ側の記事とはちょうど1年のズレを生じている。およそ暦の問題は複雑なので，今はこの事実のみをしるして，再考を期したい。

A JAPANESE IN MUSCOVY

Yoshikazu NAKAMURA

Very little is known about a Japanese Christian who suffered martyrdom in Muscovy in the midst of the *smuta*, the Time of Troubles.

According to one of the first written records on him, N. Trigault's *De Christianis apud Iaponios Triumphis*, München, 1623, this Japanese was brought by his parents as an infant to Manila and was baptized there into the Christian church by an Augustinian, F. Nicolas de Melo. Another martyrologic source, A. Castro's *Misioneros Augustinos en el Extremo Oriente 1565–1780*, Madrid, 1954, tells us that in 1594 he took monastic vows by the name of Nicolas de St. Augustine. But

no Japanese historical materials have yet been found either about this lay brother Nicolas or about his parents.

In the history of Japan, the century preceding the adoption of the notorious isolation policy (1639) was distinguished for the energetic push of her countrymen toward Southeast Asia. Early pirates were gradually replaced by emigrants. Japanese ships frequented Formosa, the Philippines, Indo-China, Siam, Malaysia, Burma and Indonesia, where Japanese towns had been set up. Prof. S. Iwao, a Japanese historian, estimates that Japanese colonists of this period numbered from 7,000 to 10,000. Among the Japanese settlements the biggest was that of Dilao in the suburbs of Manila. It is known that in 1953 the Japanese inhabitants of Dilao numbered 300. (The population kept increasing and reached 1,000 in 1595, and 3,000 in 1622.)

Nicolas' spiritual father Nicolas de Melo was a Portuguese by birth. Brought to the New Continent in his youth, he entered a Mexican monastery of the Order of St. Augustine in 1580 when he was 30 years of age. Two years after that, he was sent to the Philippines for missionary work. Soon he was put in charge of training novices at a monastery in Manila. And in 1596 a district assembly of the Order of St. Augustine chose Melo as a delegate to the general congress of the Order to be held in Rome. It was also decided that his Japanese disciple Nicolas would accompany him.

In the next year they set out from Manila on board a Portuguese ship and arrived at Goa via Macao and Malacca. All these towns belonged to Portugal at that time. In Goa, however, they were greatly discouraged to learn that no ship would sail for Europe from India during the year. Therefore, in order not to be late for the congress, they made up their minds to go by sea as far as Hormuz and then traverse Persia by land. But something unexpected seems to have happened to them in Hormuz. Losing sight of the two Nicolases here, we find them again more than two years later in the Court of Shah Abbas the Great, which was located in Isfahan, then the capital of Persia.

In the spring of 1600 the shah was planning to send a mission with a Persian dignitary and Sir Anthony Sherley as ambassadors to Europe to propose an alliance against the common enemy Ottoman Turkey. Anthony Sherley, an English aristocrat who had studied at Oxford, served the shah as a military advisor at that time. Having been presented to the shah, Melo was entrusted with letters addressed to the Pope Clement VIII and the Spanish King Philip III and he and his companion started for Europe through Russia in the company of the Persian delegation.

According to the interesting records of English ambitious adventurers, *The Three Brothers, or the Travels and Adventures of Sir Anthony, Sir Robert and Sir Thomas Sherley in Persia, Russia, Turkey etc*, London, 1825, a deep enmity between Anthony Sherley and Nicolas Melo grew during their travel up the Volga. This

antagonism, primarily based on religious and personality differences finally brought about the tragic ruin of the latter. When the mission arrived at Moscow perhaps in late autumn, Melo and his follower Nicolas were invited to stay at the house of Paolo Cittadini, a Milanese who was a court physician to Tsar Boris Godunov. It goes without saying that the Italian was a Roman Catholic. At that time a daughter was born to the doctor and Melo baptized the baby in the Catholic ritual. This act did not go unnoticed. A Jesuit historian, P. Pierling, surmises that it was betrayed to the Russian authorities by the malicious A. Sherley: Catholic liturgy was strictly prohibited in Muscovy until the end of the 17th century. P. Cittadini's house in the Kremlin was searched and the shah's letters to the Pope and the Spanish king were discovered. Accused probably both of religious and political offenses, the two Augustinians were exiled by order of the tsar to the famous Orthodox monastery on the island Solovki in the White Sea.

The *smuta* broke out in 1604. The false Dmitry, who pretended to be son of Tsar Ivan the Terrible, invaded Russia with the support of Polish magnates. In the following year Boris Godunov died and the usurper came to the throne. He had been converted to Catholicism while in Poland, and at request of Pope Clement VIII, confirms the martyrology, Dmitry ordered the release of the Catholic prisoners from the monastery of Solovki. A second *coup d'etat*, however, burst out in the summer of 1606, when F. Melo and B. Nicolas were on their way to Moscow after being released. The false Dmitry was slain by the agitated mobs of Moscow, and boyar Vasily Shujsky was acclaimed the new tsar of Russia.

When the two Nicolases reached Moscow, says N. Trigault, Tsar Vasily "cast them into the darkest cell of a jail", telling them that they would be set free and granted royal favor as soon as they denounced Catholicism and accepted Orthodoxy. A curious document called the "Diary of Marina" — Marina was the daughter of a Polish magnate and had been married to the false Dmitry — helps us to get a glimpse of their life of this period. It reveals that Melo and his follower were shut up in Borisoglebsky Monastery in Rostov about 200 km to the north of Moscow, and that the Catholic priest carried on a correspondence with Marina's father, J. Mniszech, who had been banished from Moscow to Jaroslavl' on Volga, far to the north of Rostov, as a result of the downfall of his son-in-law. Surprisingly, Melo, under confinement in the monastery, was quite well acquainted with the situation at the Court of Tsar Vasily Shujsky and had abundant knowledge of battles of the tsar's army with rebel peasants and Cossacks on remote southern fields. He was even in personal contact with a pro-Polish Moscovite boyar.

In July, 1610, Tsar Vasily was obliged to abdicate the crown. In the autumn of the same year Moscow was occupied by a Polish garrison: groups of boyars had elected as tsar Vladislav, a son of the king of Poland.

N. Trigault tells that the two Catholic prisoners were transported in 1610 to Nizhny Novgorod and, as all persuasion, threats and severe torture had proved useless for converting them to Orthodoxy, lay brother Nicolas was decapitated on November 30, 1611 by order of Tsar Vasily Shujsky. Anachronism is obvious here, for Vasily was not on the throne in 1611. Moreover, we cannot but suspect over-simplification of the actual situation in N. Trigault's account.

In September 1611, in Nizhny, Kuz'ma Minin was chosen the *starosta* head of the commoners' community. He proposed and began organizing a strong militia with the purpose of driving the intervening Polish army from the capital. (This goal was accomplished in the following year). From this we may easily imagine that anti-Polish (i. e. anti-Catholic) sentiment was running high throughout the town at the moment of the martyrdom of the Japanese Nicolas. Our conclusion is that Nicolas' death was related to the political atmosphere of the time, in other words, his execution was the result more of political than religious considerations.

Melo, on the other hand, was not killed then. He survived his follower, in spite of the fact that not brother Nicolas but he himself had been convicted of performing the Catholic service of christening and of clandestine possesion of Shah Abbas' letters. He was spared, in our conjecture, as a hostage more valuable, and as an informant possibly more helpful should he be persuaded to conversion. Nevertheless, he was unable to return home alive either. Within a year or two, he managed in an unknown way to flee from Nizhny Novgorod and join a band of Cossacks under the command of *ataman* Ivan Zarutsky, the third husband of ex-*Tsarevna* Marina Mniszech. After a short stay in Astrakhan, the band was expelled from the town by a punitive force of the new Romanov dynasty and surrendered on a small island of the lower Ural. It is believed that Melo was martyrized together with his new disciple Barbara, a lady-attendant of Marina in 1614 or 1616.

Brother Nicolas was the first Japanese to leave his footprints, though faint, on the soil of Russia. The Russians might have obtained more or less reliable information on Japan through him and his spiritual father. Nicolas had never returned to Japan since he left as an infant, but he must have heard much from his parents and other members of the Dilao community. We agree with Prof. K. Cherevko, a contemporary Soviet Japanologist, that he may have been the source of information which probably played some part in the formation of the "Belovod'e", a legend of Russian Old Believers in which Oponia, that is, Japan was taken for a utopia where there was no war or religious persecutions.